

# Book Review

## 大正昭和の歯科界を生きて／4つの部門のパイオニア 岡本清纒 歯界遍歴の足跡

上田祥士 編

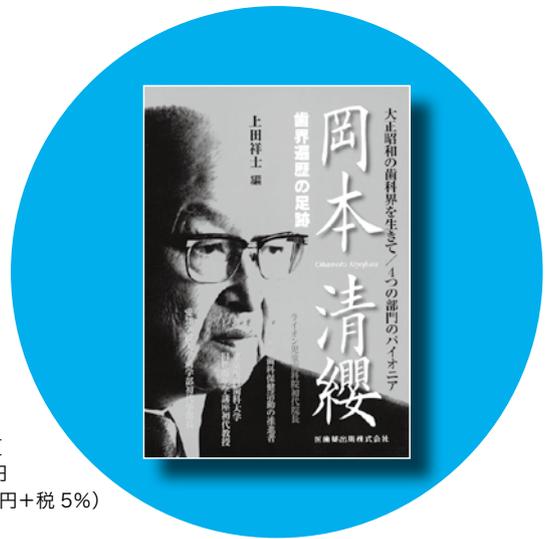


Reviewer

石井拓男

(東京歯科大学社会歯科学研究室)

A5 判 180 頁  
定価 3,150 円  
(本体 3,000 円+税 5%)  
医歯薬出版刊



わが国最初の、小児歯科診療所の院長。戦後再建された、日本学校歯科医学会の初代理事長。東京医科歯科大学の口腔衛生学講座の初代教授。戦後初の私立歯科大学である、愛知学院大学歯学部部の初代学部長。この4つの、わが国歯科界の歴史的な立場にあったのが岡本清纒先生である。

このたび、医歯薬出版から発刊された『大正昭和の歯科界を生きて／4つの部門のパイオニア 岡本清纒 歯界遍歴の足跡』は、岡本先生の孫にあたる上田祥士先生によって編纂された伝記である。上田先生自身が歯科医師であることから、先人の歯科医師の歩みを捉える視点と、肉親に対する視点が随処に交差しており、面白く読みやすい本となっている。

岡本清纒先生は、大正6年に東京歯科専門学校を卒業された。当時の東京歯科は、明治40年に専門学校に昇格し教育が充実した時期であった。後世に残る名だたる教員が教鞭をとり、教授科目も整備された時に岡本清纒先

生は歯科学生生活を過ごしたのである。

また、歯科界を取り巻く環境で注目すべきことは、ライオン口腔衛生講演会をはじめ、全国で口腔衛生のキャンペーンが活発となり始めた時期でもあった。ライオン(小林富治郎)から日本連合歯科医会(現日本歯科医師会)に会の年間経費の3倍以上の寄付が口腔衛生普及事業にと寄贈されたのは大正3年であった。本文中に、卒業前に恩師からライオンへの就職を命じられ、困惑するも即座に受け入れることを決断したくだりは、時代をあらわすとともに、岡本先生の人となり、その後の先生の歩みを決めたエピソードとして興味深い。

岡本先生は歯科界の興隆期に東京歯科を卒業し、国民に対する口腔衛生普及活動のスタート時にその最先端にあった方である。その象徴的なものが、わが国初の児童歯科医院設立である。小児歯科の嚆矢として歴史に残るこの歯科医院に、開設時に歯科界から反対運動のあったことが本書にも述べ

られている。現在と照らし合わせて、種々考えさせられるところである。児童歯科医院での診療活動と連動して、学校歯科保健と歯科衛生士養成にも岡本先生は尽力されたが、これまた後世に残る仕事であった。

戦後、それまでの岡本先生の業績が評価され、東京医科歯科大学の初代口腔衛生学教室の教授として招かれたが、すでに先生は60歳となっておられた。さらに、愛知学院大学歯学部の設立に尽力された時は66歳であった。岡本先生の超人ぶりが理解できよう。

当時、私立歯科大学の設立は不可能と言われ、実際、多くの困難を乗り越えた末の設立であった。岡本清纒先生が詠まれた「ほころばぬままの花などあるべしや」の句は、歯学部設立の許可がおりた時のものである。この岡本先生の句は、その後も多くの関係者に当時の感激を思い起こさせるものとなった。本書も、岡本清纒先生直筆によるこの句によって、美しく装丁されている。